

現代中国語の文末助詞“了”の研究

—行為域における文末助詞“了”の意味の形成メカニズムに関する検証—

A Study on the Sentence-final Particle *LE* in Modern Chinese:
The Verification of the Formation Mechanism of the Meanings of the
Sentence-final Particle *LE* in the Propositional Domain

鄧 宇 陽

DENG Yuyang

In this study, the formation mechanism of the meanings of the sentence-final particle *LE* in the propositional domain, is defined as follows. In a sentence containing the sentence-final particle *LE* in the propositional domain, if the semantic focus falls on the predicate representing the meaning of “instant”, the *LE* will show the meaning of “occurrence”, but if the semantic focus falls on the sentence element representing the meaning of “process / static phase”, the *LE* will show the meaning of “replacement”. This study attempts to test and verify this formation mechanism with different kinds of illustrative sentences.

キーワード： 文末助詞“了”、行為域、意味、形成メカニズム

Keywords： Sentence-final particle *LE*, Propositional domain, Meanings, Formation mechanism

1. はじめに

中国語学において、語尾“了”は“了1”とも呼ばれ、文末助詞“了”は“了2”とも呼ばれている（呂叔湘 2016：351）。肖治野・沈家煊（2009）は、Sweetser（1990）、沈家煊（2003）を踏まえて、“了2”を「行為域」（行域）の“了2”、「認知域」（知域）の“了2”、「言語域」（言域）の“了2”という三種類に分けて、“了2”の意味研究領域において新しい研究方法を提示している。本論文では、行為域の“了2”を“了2〈行為〉”と呼び、“了2”が含まれる文をS“了2”と呼び、“了2〈行為〉”が含まれる文をS“了2〈行為〉”と呼ぶことにする。Deng（2019）と鄧（2019）は[+変化]と[-変化]の意味特徴を基準に、“了2〈行為〉”の意味を「発生」義と「変化」義に分けている。鄧宇陽（2019：51）は「点的事象」（点状事件）、「線的状態」（線状状態）、「面的状態」（面状状態）、「意味的焦点」（语义焦点）という四つの概念に基づいて、「発生」義と「変化」義の形成メカニズムを初めて次のように提起している。

文末助詞“了〈行為〉”が指示する意味的焦点は点的事象に当てられるならば、文末助詞“了〈行為〉”は「発生」義を表す一方、線的狀態または面的狀態に当てられるならば、「変化」義を表す。(当句末助詞“了〈行〉”凸顯的焦點是點狀事件時，句末助詞“了〈行〉”表示“發生”義；當句末助詞“了〈行〉”凸顯的焦點是線狀狀態或者面狀狀態時，句末助詞“了〈行〉”表示“變化”義。)

上述の形成メカニズムはただ論理的に提起されているところにとどまり、それに関する実際使用有効性はまだ検証されていない。

実は、鄧宇陽 (2019) が述べている「点的事象」は S“了 2 〈行為〉”の述語が表す起動相、完了相、結果相の意味であり、[+瞬間] の意味特徴がある。「線的狀態」は S“了 2 〈行為〉”の述語が表す進行相、持続相の意味であり、[+過程] の意味特徴がある。「面的狀態」は S“了 2 〈行為〉”のある文成分の静相の意味である。鄧宇陽 (2019) が規定している静相の意味とは、動相が指示する動的段階に対して、ある語が指示する何らかの内的属性、現象、態勢などの静的特徴である。こうして、どの語でも静相の意味を持つべきであるということが分かる。本論文では、「点的事象」、「線的狀態」、静相の意味をそれぞれ「瞬間」義、「過程」義、「静相」義と呼ぶことにする。それでは、鄧宇陽 (2019) が提起している“了 2 〈行為〉”の意味の形成メカニズムを次のように書き換えることができる。

S“了 2 〈行為〉”は、意味的焦点が「瞬間」義を表す述語という文成分に当てられるならば、「発生」義を生み出すが、意味的焦点が「過程/静相」義を表す文成分に当てられるならば、「変化」義を生み出す。

また、“了 2 〈行為〉”の意味の形成メカニズムを表 1 で示す。

表 1 “了 2 〈行為〉”の意味の形成メカニズム

“了 2 〈行為〉”の意味	“了 2 〈行為〉”が連結する焦点
「発生」義	焦点=「瞬間」義を表す述語
「変化」義	焦点=「過程/静相」義を表す文成分

本論文では、S「瞬間述語+“了 2 〈行為〉”」、S「過程述語+“了 2 〈行為〉”」、S「静相述語+“了 2 〈行為〉”」という三つの構文に基づいて、“了 2 〈行為〉”の意味の形成メカニズムを検証する。

2. 関連する概念の説明

2.1. 「発生」義と「変化」義

Deng (2019) と鄧 (2019) が指摘したように、「発生」義とは、出来事を表す概念として、現実的時間の展開にしたがって何らかの出来事が「無」の状態から「有」の結果になったということを表す。具体的には「発生した」、「起こった」、「あった」などの意味を指す。「発生」義の[-変化]の意味特徴とは、出来事が生じる前の状態、つまり、「無」の状態を際立たせず、出来事が生じた結果、つまり、「有」の結果だけを際立たせるということである。また、「変化」義とは、古い状態の存在を含意する概念として、現実的時間の展開にしたがって何らかの古い状態が何らかの新しい状態に変わったということを表す。具体的には、「……に変化した」、「……に変わった」、「……になった」、「……という新たな段階に入った」などの意味を指す。「変化」義の[+変化]の意味特徴とは、新しい状態が生じたことも古い状態が存在していたことも際立たせるということである。

2.2. 「瞬間」義、「過程」義、「静相」義の言語形式

鄧宇阳 (2019) から明らかのように、「点的事象」と「線的状态」、つまり、本論文で述べる「瞬間」義と「過程」義は一定の言語形式によって表される。また、どの語でも「静相」義を持つので、「瞬間」義の言語形式であれ、「過程」義の言語形式であれ、いずれも「静相」義を表す言語形式として捉えることが可能である。ただし、「瞬間」義の言語形式と「過程」義の言語形式以外に、専ら「静相」義しか表さない言語形式もあると鄧宇阳 (2019) に指摘されている。鄧宇阳 (2019) が述べている「瞬間」義の言語形式、「過程」義の言語形式、「静相」義の言語形式を次の表 2-4 でまとめる。

表 2 「瞬間」義の言語形式

「瞬間」義の言語形式	①「裸形動詞+点的動相標識」構造の複合動詞 ②程度副詞で修飾されることができず、点的動相標識と共起することができる裸形動詞
------------	--

表 3 「過程」義の言語形式

「過程」義の言語形式	①「裸形動詞+線的動相標識」構造の複合動詞 ②程度副詞で修飾されることができず、線的動相標識と共起することができる裸形動詞
------------	--

表4 「静相」義の言語形式

「静相」義の 専有 の言語形式	①点的動相標識とも線的動相標識とも共起することができない裸形動詞 ②程度副詞で修飾されることができる裸形動詞 ③「助動詞 (+本動詞)」構造 ④動詞以外の品詞
「静相」義の 非専有 の言語形式	①「瞬間」義の言語形式 ②「過程」義の言語形式

邓宇阳 (2019) から明らかなように、文脈によって、動詞は「瞬間」義と「過程」義という動相的意味を表す場合もあり、「静相」義を表す場合もある。どのような文脈でも、動詞以外の文成分は「静相」義だけを表す。中国語では、動詞だけでなく、動詞以外の文成分も述語に充てることができる (朱德熙 2016)。このように、中国語の述語が表す意味を網羅的に「瞬間」義、「過程」義、「静相」義という三種類に分けられる。また、中国語の述語の言語形式も「瞬間」義の言語形式、「過程」義の言語形式、「静相」義の言語形式という三種類に分けられる。ここで、言語形式が「瞬間」義の言語形式、「過程」義の言語形式、「静相」義の言語形式である述語をそれぞれ「瞬間述語」、「過程述語」、「静相述語」と呼ぶことにする。また、「瞬間述語」、「過程述語」、「静相述語」が含まれる S“了 2 〈行為〉”をそれぞれ S「瞬間述語+“了 2 〈行為〉”」、S「過程述語+“了 2 〈行為〉”」、S「静相述語+“了 2 〈行為〉”」と呼ぶことにする。

2.3. S“了 2 〈行為〉”に関する「メタ発話場面」、「意味的焦点」、焦点文

もし、S“了 2 〈行為〉”が用いられる発話場面には S“了 2 〈行為〉”以上の意味情報が含まれないとしたら、本論文ではこのような発話場面を「メタ発話場面」と呼ぶことにする。例えば、次の (1a) で説明する。

- (1) a. A : 他是科长了?
 B : 他是科长了。
 (A : あの方は課長になったか?)
 (B : あの方は課長になった。)
- b. A : 他是科长了?
 B : 是了。

(A : あの方は課長 (である) になったか?)

(B : (である) なった。)

(1a) において、B の“他是科长了” (あの方は課長になった) という S“了2〈行為〉”が用いられる発話場面は、A と B の対話内容によって構成されている。A と B の対話から分かるように、(1a) という発話場面には“他是科长了” (あの方は課長になった) という S“了2〈行為〉”の意味情報だけが含まれ、それ以上の意味情報が含まれない。そのため、(1a) という発話場面は“他是科长了” (あの方は課長になった) の「メタ発話場面」と呼ばれる。

焦点の概念について、祁峰 (2012 : 4-23) は次のように指摘している。視点や立場によって焦点の定義も違うが、どちらかという、どのような焦点であっても、「省略できない部分を際立たせる操作と、意識的かつ音韻的にストレスを際立たせる操作」(不可簡省的突显和刻意重音的突显) という特徴においてはほぼ共通している。徐烈炯 (2017 : 172-190) は、焦点を「情報的焦点」(informational focus)、「意味的焦点」(semantic focus)、「話題的焦点」(topic focus)、「対比的焦点」(contrastive focus) という四種類に分けている。「意味的焦点」とは、「焦点敏感演算子」(focus-sensitive operator) が指示する文の部分である (徐烈炯 2017 : 175-176)。「意味的焦点」と「焦点敏感演算子」について、端的にいえば、ある機能語が文の特定の部分と意味的に連結することができ、文の別の部分と意味的に連結することができないとしたら、文のその特定の部分は「意味的焦点」と呼ばれ、その機能語は「焦点敏感演算子」と呼ばれる。邓宇阳 (2019 : 50) は「焦点敏感演算子」の「浮遊性」(floating) や文の真理条件への影響などの特徴から、“了2〈行為〉”が「焦点敏感演算子」であることと、“了2〈行為〉”と連結する特定の部分が「意味的焦点」であることを論述している。本論文では「意味的焦点」を「焦点」と略称する。

実は、「メタ発話場面」において、(1a) の B 文は (1b) の B 文に短縮されることができ、邓宇阳 (2019 : 50) は (1b) の B 文の言語形式が「焦点成分+“了2〈行為〉”」であることを指摘しており、「焦点成分+“了2〈行為〉”」を S“了2〈行為〉”の焦点文と呼んでいる。

第3節から、本論文で定義している S“了2〈行為〉”の「メタ発話場面」と邓宇阳 (2019) が述べている S“了2〈行為〉”の焦点文を合わせて S“了2〈行為〉”の焦点の位置を検証する。

2.4. 「述語優先」原則と「焦点争奪」現象

S“了2〈行為〉”について、黄瓚辉 (2016 : 42-58) は次の二つの言語現象を指摘している。第一に、S“了2〈行為〉”の言語形式が「简单形式」(简单形式) であれば、つまり、

文成分が少なければ、S“了 2〈行為〉”の焦点は述語という文成分に当てられる。第二に、S“了 2〈行為〉”の言語形式が「複雑形式」(复杂形式)であれば、つまり、文成分が多ければ、述語以外の文成分が述語と焦点位置を争う可能性があり、そのS“了 2〈行為〉”の適格性は低くなる可能性もある。ここでは、前者の言語現象が映す原則をS“了 2〈行為〉”の「述語優先」原則と呼び、後者の言語現象をS“了 2〈行為〉”の「焦点争奪」現象と呼ぶことにする。

S“了 2〈行為〉”において、どのような文成分が述語の焦点位置を奪いやすいのかについては、黄瓚輝(2016: 42-58)に説明されていないが、取り上げられている例文の構文的特徴からみれば、連体修飾語と連用修飾語が述語と焦点位置を争いやすいということが分かる。では、第一に、連体修飾語と連用修飾語の種類が数多くあるが、どのような特徴の連体修飾語と連用修飾語がS“了 2〈行為〉”の述語の焦点位置を奪いやすいのであろうか。第二に、S“了 2〈行為〉”において、連体修飾語と連用修飾語の他に、述語の焦点位置を争いやすい文成分があるのであろうか。第三に、S“了 2〈行為〉”が「簡単形式」であれば、S“了 2〈行為〉”の焦点は必ず述語に当てられるのであろうか。第四に、発話場面や文脈はどのようにS“了 2〈行為〉”の焦点位置に影響を与えるのであろうか。これらの問題について黄瓚輝(2016)は触れていない。次節から、“了 2〈行為〉”の意味の形成メカニズムを大量の実例の分析に運用して、黄瓚輝(2016: 42-58)がまだ触れていない問題点を説明しながら、“了 2〈行為〉”の意味の形成メカニズムの実際使用有効性も検証する。

3. S「瞬間述語+“了 2〈行為〉”」の「発生/変化」義

3.1. 「メタ発話場面」におけるS「瞬間述語+“了 2〈行為〉”」

3.1.1. S「瞬間述語+“了 2〈行為〉”」に連体修飾語、連用修飾語、補語が付与されない場合

次の(2) - (4)は連体修飾語、連用修飾語、補語¹が付与されない文であり、黄瓚輝(2016: 42-58)が述べている「簡単形式」という構文的特徴に合う。

¹ 刘月华ほか(2016: 533-628)は補語を①結果補語、②方向補語、③可能補語、④状態補語、⑤程度補語、⑥数量補語、⑦前置詞補語という七種類に分けており、また、①結果補語の形であるが程度義を表すという補語を⑤程度補語に類別している。実は、中国語の補語体系は複雑で、意味的に重なったり矛盾したりするところが多いため、「補語」という概念は述語と連用修飾語の下位概念として捉えられる研究もある(金立鑫 2009)。本論文では、補語という概念を用いるが、ただし再定義する。まず、本論文では、①結果補語の形であるが程度義を表すという補語を①結果補語の類に類別し直す。また、孙英杰(2006)に基づいて、①結果補語と②方向補語を複合動詞の構成要素として位置づけて、補語の範囲から除外する。さらに、朱德熙(2016)に基づいて、数量補語を目的語の類に類別する。それでは、中国語の補語を可能補語、状態補語、程度補語、前置詞補語という四種類に再分類する。

- (2) 下雨了。(陈小红 2007 : 58)
 (雨が降った。)
- (3) 他见到她了。(陈小红 2007 : 58)
 (彼は彼女に会った。)
- (4) 他吃了饭了。(陈小红 2007 : 56)
 (彼はご飯を食べた。)

黄瓚辉 (2016) の観点からみれば、(2) - (4) には、述語の焦点位置を争いやすい連体修飾語と連用修飾語が付与されないので、「述語優先」原則によって、(2) - (4) の焦点が述語にだけ当てられ、「焦点争奪」現象が起こらないはずである。ここで、「メタ発話場面」において、(2) - (4) を「焦点成分+“了2〈行為〉”。」という S“了2〈行為〉”の焦点文に短縮して、(2) - (4) の焦点が述語に当てられるかどうかを検証する。

- (5) 〈(2) の焦点検証〉
 A : 下雨了?
 B : 下了。/#²雨了。
 (A : 雨が降ったか?)
 (B : 降った。/#雨になった。)
- (6) 〈(3) の焦点検証〉
 A : 他见到她了?
 B : 见到了。/#他了。/#她了。
 (A : 彼は彼女に会ったのか?)
 (B : 会った。/#彼になった。/#彼女になった。)
- (7) 〈(4) の焦点検証〉
 A : 他吃了饭了?
 B : 吃(了)了³。/#他了。/#饭了。
 (A : 彼はご飯を食べたのか?)
 (B : 食べた。/#彼になった。/#ご飯になった。)

(2) - (4) の焦点を検証すると、上記の (5) - (7) の B の発話の容認可能性が示すように、(2) - (4) の焦点は確かに述語に当てられるということが分かる。

² 文頭の#は、文脈上から何らかの逸脱性を持つ文を指す標識である。

³ 吕叔湘 (2016)、王维贤 (1997) から分かるように、“了1”と“了2”は隣接すれば、形式的には一つの“了”だけで表記される。

また、陈小红（2007：54-60）は、(2) - (4) の“了 2”は主に“实现”（実現）または“发生”（発生）、つまり、本論文で述べる「発生」義を伝えやすく、状態の“变化”（変化）、つまり、本論文で述べる「変化」義は伝え難いと指摘している。それでは、(2) - (4) は「発生」義の形成メカニズムに適合するのであろうか。次の二点に分けて検証しよう。第一に、上述の焦点検証から分かるように、(2) - (4) の焦点は確かに述語に当てられる。第二に、(2) の述語“下”（降る）は「②程度副詞で修飾されることができず、点的動相標識と共に起ることができる裸形動詞」という「瞬間」義の言語形式に相当し、(3) の述語“见到”（会う）と (4) の述語“吃了 1”（食べてしまう）は両方とも「①『裸形動詞+点的動相標識』構造の複合動詞」という「瞬間」義の言語形式に相当するので、(2) - (4) の述語はいずれも「瞬間」義を表すことができる。このように、(2) - (4) は、「焦点=『瞬間』義を表す述語」という「発生」義の形成メカニズムに適合するということが分かる。この結論は、陈小红（2007）の主張を裏付けている。

3.1.2. S「瞬間述語+“了 2〈行為〉”」に連体修飾語/連用修飾語/補語が付与される場合

次の (8)、(9) はそれぞれ“那天晚上”（その夜に）という時間的連用修飾語と“在上海”（上海で）という場所的連用修飾語を伴っている。(8)、(9) は (2) - (4) という「単形式」よりやや複雑になっている。ここで、(8) の時間的連用修飾語と (9) の場所的連用修飾語は数量を示さない文成分であるということに注意されたい。

(8) 那天晚上下雨了⁴。(杉村 2009：5)

(その夜に雨が降った。)

(9) 他在上海买礼物了。(杨凯荣 2013：35)

(彼は上海でお土産を買った。)

杉村（2009：1-12）、杨凯荣（2013：31-43）によれば、(8)、(9) の“了 2”は何らかの新状況が特定の時間や場所に“出現”（出現）したこと、つまり、本論文で述べる「発生」義を表すが、何らかの状態が“变化”（変化）したこと、つまり、本論文で述べる「変化」義は表し難い。それでは、(8)、(9) は「発生」義の形成メカニズムに適合するのであろうか。次の二点に分けて検証しよう。第一に、(8)、(9) を S“了 2〈行為〉”の焦点文の形に短縮して (8)、(9) の焦点を検証すると、次の焦点検証の結果が示すように、(8)、(9) の焦点は述語に当てられるということが分かる。

⁴ (8) は杉村（2009：5）の原文“那天晚上下雨了吗?”を書き換えたものである。

(10) 〈(8) の焦点検証〉

A: 那天晚上下雨了?

B: 下了。/# 那天晚上了。/# 雨了。

(A: その夜に雨が降ったのか?)

(B: 降った。/# その夜になった。/# 雨になった。)

(11) 〈(9) の焦点検証〉

A: 他在上海买礼物了?

B: 买了。/# 他了。/# 在上海了。/# 礼物了。

(A: 彼は上海でお土産を買ったのか?)

(B: 買った。/# 彼になった。/# 上海になった。/# お土産になった。)

第二に、(8) の述語“下” (降る) と (9) の述語“买” (買う) は「②程度副詞で修飾されることができず、点的動相標識と共起することができる裸形動詞」という「瞬間」義の言語形式に相当するので、「瞬間」義を表すことができる。このように、(8)、(9) は「焦点=『瞬間』義を表す述語」という「発生」義の形成メカニズムに適合するということが分かる。この結論は、杉村 (2009)、楊凱榮 (2013) の主張を裏付けている。ところで、(8)、(9) の焦点検証から明らかのように、S「瞬間述語+“了 2 〈行為〉”」以上の意味情報が付与されない場合、数量を示さない時間的連用修飾語と場所的連用修飾語は容易に S「瞬間述語+“了 2 〈行為〉”」の述語の焦点位置を奪うことができない。

次の (12) - (16) は、上記の (8)、(9) が示す時間的連用修飾語と場所的連用修飾語ではなく、補語、様態的連用修飾語、副詞的連用修飾語、数量的連体修飾語、数量的目的語のいずれかを伴う例文である。a 例と b 例の形式的な相違は、前者は“了 2 〈行為〉”を伴わず、後者は“了 2 〈行為〉”を伴う点である。楊凱榮 (2013)、王珊珊 (2014) によれば、“了 2 〈行為〉”を伴う (12b) - (14b) は、文法的には適格であるにもかかわらず、(12b) - (14b) 以上の意味情報が付与されなければ、(12a) - (14a) より理解され難くなり、容認度は低い。

(12) a. 他唱歌唱得真好听。(王珊珊 2014 : 139)

(彼はうまく歌える。)

b. ?⁵他唱歌唱得真好听了。(王珊珊 2014 : 139)

(?彼はうまく歌った。/?彼はうまく歌えるようになってきている。)

(13) a. 他随随便便地回答了我。(楊凱榮 2013 : 33)

⁵ 文頭の?は、「メタ発話場面」以外の情報が追加されなければ理解され難い文を指す標識である。

(彼に勝手に答えられた。)

b. ?他随随便便地回答我了。(杨凯荣 2013 : 33)

(?彼に勝手に答えられた。/?彼に勝手に答えられるようになった。)

(14) a. 弟弟昨天一边看电视, 一边做作业。(杨凯荣 2013 : 41)

(弟は昨日テレビを見ながら、宿題をしていた。)

b. ?弟弟昨天一边看电视, 一边做作业了。(杨凯荣 2013 : 41)

(?弟は昨日テレビを見ながら、宿題をしていた。/?弟は昨日からテレビを見ながら、宿題をするようになってきた。)

しかし、同じく“了2〈行為〉”を伴っても、次の(15b)、(16b)は上記の(12b) - (14b)より容認度が高い。

(15) a. 我学会了两个游戏。

(私は二つのゲームのルールを覚えた。)

b. 我学会两个游戏了。(BCC)

(私はゲームのルールを二つ覚えた。/私が覚えたゲームのルールは二つになった。)

(16) a. 他当大夫当了十几年。

(あの方は医者に十数年勤めている。)

b. 他当大夫十几年了。(刘月华ほか 2016 : 619)

(あの方は医者に十数年勤めている。/あの方は医者に勤めて十数年になる。)

ここで、(12b) - (16b)をS“了2〈行為〉”の焦点文の形に短縮して、(12b) - (16b)の焦点を検証してみよう。

(17) 〈(12b)の焦点検証〉

A: 他唱歌唱得真好听了?

B: #对的, 唱了。/?对的, 真好听了。

(A: 彼はうまく歌えるようになってきているの?)

(B: #そうよ, 歌ったよ。/?そうよ, うまくなってきているよ。)

(18) 〈(13b)の焦点検証〉

A: 他随随便便地回答你了?

B: 是的, 随随便便地了。/?是的, 回答了。

(A: 彼に勝手に答えられるようになったのか?/彼に勝手に答えられたの?)

(B: そう, 勝手にになった。/?そう, 答えられた。)

(19) 〈(14b)の焦点検証〉

A: 弟弟昨天一边看电视一边做作业了?

B: #对, 看了, 做了。/对的, 一边 (看电视) 一边 (做作业) 了。

(A: 弟は昨日からテレビを見ながら宿題をするようになってきたの?)

(B: #そう、見た。また、した。/そう、(テレビを見) ながら (宿題をするよう) になってきた。)

(20) 〈(15b)の焦点検証〉

A: 你学会两个游戏了?

B: 是啊, 学会了。/是啊, 两个了。

(A: ゲームのルールを二つ覚えたの?)

(B: そうよ、覚えたよ。/そうよ、二つになったよ。)

(21) 〈(16b)の焦点検証〉

A: 他当大夫十几年了?

B: 是啊, 当 (十几年) 了。/#是啊, 当 (大夫) 了。/是啊, 十几年了。

(A: あの方は医者に勤めて十数年になるの?)

(B: そうよ、(十数年) 勤めているよ。/#そうよ、(医者に) 勤めているよ。/そうよ、十数年になるよ。)

焦点検証を行うと、(12b) - (16b) の焦点はすべて述語以外の文成分に当てられることができるということが分かる。例えば、(12b) - (16b) の焦点が当てられるのは、(12b) では“ (得) 真好听” (うまく) という補語であり、(13b) では“随随便便地” (勝手に) という様態的連用修飾語であり、(14b) では“一边” (ながら) という副詞的連用修飾語であり、(15b) では“学会” (覚える) という述語だけでなく、“两个” (二つ) という数量的連体修飾語でもあり、(16b) では“当” (勤める) という述語だけでなく、“十几年” (十数年) という数量的二次目的語⁶でもある。この結果が示しているのは、少なくとも、補語、様態的連用修飾語、副詞的連用修飾語、数量的文成分という四種類の文成分が S“了2 (行為) の述語の焦点位置を奪いやすいということである⁷。

では、なぜ、同じ S“了2 (行為)”であるのに、(15b)、(16b) のほうが (12b) - (14b) より容認度が高いのか。本論文では、その理由は、“了2 (行為)”が「発生」義を表すか、

⁶ 「二次目的語」(准宾语) の概念について、朱德熙 (2016: 116-121) をご参照のこと。

⁷ この四種類の文成分は、意味的に重なっているところもあり、違うところもある。また、もともと、(15b) の“两个” (二つ) は数量的連体修飾語であり、(16b) の“十几年” (十数年) は数量的二次目的語であるが、石定栩・胡建华 (2006) が指摘するように、“了2<行為>”の前の数量的文成分が S“了2<行為>”の容認度を低める可能性があるということから、ここで、“两个” (二つ) と“十几年” (十数年) を数量的文成分と総称する。

それとも、「変化」義を表すかという問題に関わっていると主張する。まず、聞き手は、(12b) - (16b) の焦点を (12b) - (16b) 以外の意味情報を通じて特定することができなければ、「述語優先」原則を通じて、(12b) - (16b) の焦点を述語に優先的に当てるはずである。一方では、(12b) - (14b) の焦点を検証した結果、(12b) - (14b) の焦点はそれぞれ補語、様態的連用修飾語、副詞的連用修飾語に、つまり、「静相」義の専有の言語形式にしか当てられていないことが確認された。この焦点検証の結果は「述語優先」原則と矛盾するため、「焦点争奪」現象は生じる。このように、(12b) - (14b) 以外の意味情報が付与されない場合、(12b) - (14b) の焦点はどの文成分に当てられるのか、あるいは、(12b) - (14b) の“了 2 (行為)”は「発生」義と「変化」義のいずれを表すのかが特定できない⁸。そのため、(12b) - (14b) は容認度が低い文として判断されやすい。他方では、(15b)、(16b) の焦点を検証した結果、(15b)、(16b) の焦点は“两个” (二つ)、“十几年” (十数年) という「静相」義の言語形式にも、“学会” (覚える)、“当” (勤める) という瞬間述語にも自然に当てられることができるということが確認された。「瞬間述語にも自然に当てられることができる」という結果は、「S“了 2 (行為)”以外の意味情報を通じて特定することができなければ、聞き手がその焦点を優先的に述語に当てる」という「述語優先」原則に反していない。そのため、(15b)、(16b) の焦点検証の結果は「述語優先」原則と調和し、「焦点争奪」現象は生じない。このように、聞き手は、(15b)、(16b) において発話者が“了 2 (行為)”を用いる意図を「発生」義を表すことと捉えることができる。そのため、(15b)、(16b) は容認度が高い文として捉えられやすい。

中国語において、“就” (予想以上に早く)、“才” (予想以上に遅く)、“刚” ((した) ばかり)、“要” (もうすぐ/そろそろ)、“又” (また)、“终于” (やっと)、“经常” (しばしば/よく) などは使用頻度が高い副詞的連用修飾語である。これらの副詞的連用修飾語がどのように S「瞬間述語+“了 2 (行為)”」の焦点位置を奪うのかを検討していく。

(22) 他 12 点就睡了。(杨凯荣 2013 : 31)

(彼はいつもより早く 12 時に寝た。)

(23) ?他 12 点才睡了。(杨凯荣 2013 : 31)

⁸ (12b) の“唱” (歌う)、(13b) の“回答” (答える)、(14b) の“看” (見る) と“做” (する)、(16b) の“当” (勤める) などの述語はいずれも表 2 の「②程度副詞で修飾されることができず、点的動相標識と共起することができる裸形動詞」という「瞬間」義の言語形式である。(15b) の“学会” (覚える) という述語は表 2 の「①『裸形動詞+点的動相標識』構造の複合動詞」という「瞬間」義の言語形式である。このように、(12b) - (16b) の述語はいずれも瞬間述語である。仮に聞き手が (12b) - (16b) の焦点を瞬間述語に優先的に当てるとしたら、(12b) - (16b) は「焦点=『瞬間』義を表す述語」という「発生」義のメカニズムに適合して「発生」義を表すが、「静相」義の言語形式である補語、様態的連用修飾語、副詞的連用修飾語、数量的文成分などに当てるとしたら、(12b) - (16b) は [焦点=「静相」義を表す文成分] という「変化」義のメカニズムに適合して「変化」義を表す。

(?彼はいつもより遅く12時に寝た。/?彼はいつもより遅く12時に寝るようになった。)

先行研究において、副詞“就”（予想以上に早く）、副詞“才”（予想以上に遅く）と“了2〈行為〉”との共起問題がしばしば論じられてきた⁹。「メタ発話場面」の場合、“了2〈行為〉”は“就”（予想以上に早く）と共起しやすく、“才”（予想以上に遅く）と共起し難いと指摘されることがよくある¹⁰。例えば、(22)は容認度が高いが、(23)は容認度が低いと楊凱榮(2013)では考えられている。その理由はS“了2〈行為〉”の焦点という視点からも説明可能である。

(24) 〈(22)の焦点検証〉

A: 他12点就睡了?

B: 对, 睡了。/对, (12点)就(睡)了。

(A: 彼はいつもより早く12時に寝たのか?)

(B: そう、寝た。/そう、いつもより早く(12時に寝るように)なった。)

(25) 〈(23)の焦点検証〉

A: 他12点才睡了?

B: #对呀, 睡了。/对呀, (12点)才(睡)了。

(A: 彼はいつもより遅く12時に寝るようになったのか?)

(B: #そう、寝た。/そう、いつもより遅く(12時に寝るように)なった。)

(22)の焦点検証を行うと、(22)の焦点は“睡”（寝る）という瞬間述語にも、副詞“就”（予想以上に早く）という「静相」義の言語形式にも自然に当てられることができる。「述語優先」原則が作用することから、(22)の焦点は優先的に“睡”（寝る）という瞬間述語に当てられる。それでは、(22)は「発生」義を優先的に表すことができ¹¹、いったい「発生」義と「変化」義のいずれを表すのかという迷いを引き起こさない。一方、(23)の焦点検証を行うと、(23)の焦点は副詞“才”（予想以上に遅く）という「静相」義の言語形式にだけ当てられ、“睡”（寝る）という瞬間述語に当てられない。「述語優先」原則が作用することから、述語“睡”（寝る）と副詞“才”（予想以上に遅く）の間に「焦点争奪」現象が生じる。

⁹ 具体的には、岳中奇(2000)、陈荣杰(2005)、顾阳(2007)、金立鑫・于秀金(2013)、金立鑫・杜家俊(2014)、王冬梅・姜炫先(2015)などを参照のこと。

¹⁰ 具体的には、岳中奇(2000)、黎莉・胡孜(2004)、陈荣杰(2005)、顾阳(2007)、金立鑫・于秀金(2013)、金立鑫・杜家俊(2014)などを参照のこと。

¹¹ 「焦点=『瞬間』義を表す述語」という「発生」義の形成メカニズムに適合するからである。

つまり、(23) はいったい「発生」義と「変化」義のいずれを表すのかという迷いを引き起こす。そのため、「メタ発話場面」の場合、“了2〈行為〉”は“就”（予想以上に早く）と共起しやすく、“才”（予想以上に遅く）と共起し難い。

(26) ?小李刚到日本了。(杨凯荣 2013 : 38)

(?李さんは日本に着いたばかりだ。)

(27) 〈(26) の焦点検証〉

A : 小李刚到日本?

B : #是的, 到了。/*¹²是的, (现在/昨天) 刚 (到) 了。

(A : 李さんは日本に着いたばかりなのか?)

(B : #そう, 着いた。/?そう, (今/昨日) (着いた) ばかりだ。)

(26) は「(事象出現時間 T+) “刚”+述語」構文である。胡建刚 (2007)、杨凯荣 (2013)、邹海清 (2014) はそれぞれ言語の経済性の原理 (economy principles)、情報構造、現実性 (realis) などの視点から“了2〈行為〉”が「(事象出現時間 T+) “刚”+述語」構文と共起し難い理由を説明している。また、その理由は“了2〈行為〉”の「変化」義からも説明可能である。認知的には、「(事象出現時間 T+) “刚”+述語」構文は、「事象出現時間 T」と「発話時間 t」の間の間隔がゼロと見なされてもよいほど、その両者の間隔が極めて短さを示している。言い換えれば、副詞“刚”（ばかり）の語用論的機能の一つは、「事象出現時間 T」と「発話時間 t」の間の距離感を消すということである。もし、「(事象出現時間 T+) “刚”+述語」構文に“了2〈行為〉”が付与されると、何らかの時間的「変化」義が付与される可能性もある。つまり、「事象出現時間 T→発話時間 t」という時間的「変化」義が付与される可能性もある。この時間的「変化」義は、「事象出現時間 T」と「発話時間 t」の間の間隔がゼロではないということの意味しているため、副詞“刚”（ばかり）の語用論的機能、即ち、「事象出現時間 T」と「発話時間 t」の間の距離感を消すという機能と矛盾することになる。したがって、“了2〈行為〉”が「(事象出現時間 T+) “刚”+述語」構文と共起し難い。

(28) 天要亮了。(BCC)

(夜がもうすぐ明ける。/夜が明ける兆しもないという状態から明ける態勢があるという状態になった。)

(29) 〈(28) の焦点検証〉

A : 天要亮了?

¹² 文頭の*は非文を指す標識である。

B: #是的, 亮了。/是的, 要 (亮) 了。

(A: 夜がもうすぐ明けるだろう?)

(B: #はい、明けた。/はい、その (明ける) 態勢になった。)

(28) は“(天) 亮” ((夜が) 明ける) という事象がそろそろ生じるという状態を表す。その事象がまだ生じていないため、(28) の“了 2 (行為)”は本論文で規定する「発生」義、つまり、「発生した」、「起こった」、「あった」などの意味を表さず、「変化」義、つまり、古い状態から新しい状態になったという意味を表す。具体的にはどのような「変化」義を表すのか。(29) という焦点検証の結果が示すように、(28) の焦点は“(天) 亮” ((夜が) 明ける) という瞬間述語に当てられず、副詞“要” (もうすぐ/そろそろ) という「静相」義の言語形式に当てられる。そのため、(28) の“了 2 (行為)”が表す「変化」義は、具体的に“要” (もうすぐ/そろそろ) ではない状態→“要” (もうすぐ/そろそろ) である状態、あるいは、「夜が明ける兆しもないという状態→夜が明ける態勢に入っているという状態」という態勢的な「変化」を指す。

(30) 昨天他又看电视了。(谭春健 2004 : 29)

(昨日彼はまたテレビを見た。/昨日彼はまたテレビを見るようになってきた。)

(31) 〈(30) の焦点検証〉

A: 昨天他又看电视了?

B: 对, 看了。/是的, 又 (看) 了。

(A: 昨日彼はまたテレビを見たのか。/昨日彼はまたテレビを見るようになってきたのか?)

(B: そう、見た。/そう、また (見るよう) になってきた。)

(32) 那段可怕的日子终于结束了。(CCL)

(その恐ろしい日々がやつと終わった。/その恐ろしい日々がやつと終わるようになった。)

(33) 〈(32) の焦点検証〉

A: 那段可怕的日子终于结束了?

B: 是的, 结束了。/是的, 终于 (结束) 了。

(A: その恐ろしい日々がやつと終わったのか。/その恐ろしい日々がやつと終わるようになったのか?)

(B: はい、終わった。/はい、やつと (終わるよう) になった。)

焦点検証を行うと、(30)、(32)の焦点は“看”(見る)、“结束”(終わる)という瞬間述語にも、副詞“又”(また)、副詞“终于”(やっと)という「静相」義の言語形式にも当てられることができるということが分かる。そのため、(15b)、(16b)の分析と同じく、(30)、(32)は、(30)、(32)以外の意味情報が付与されなければ、「述語優先」原則が作用することから優先的に「発生」義を表すことができる。

(34) ?大崔经常来了。

(?崔さんがしばしば来た。/?崔さんがしばしば来るようになった。)

(35) 〈(34)の焦点検証〉

A: 大崔经常来了?

B: #是的, 来了。/是的, 经常了。

(A: 崔さんがしばしば来るようになったのか?)

(B: #はい, 来た。/はい, しばしば (来るよう) になった。)

“有时”(時々)、“偶尔”(偶に)、“经常”(しばしば/よく)、“常常”(しばしば/よく)、“总是”(いつも/常に)、“每次”(毎回も/毎に)などの頻度的副詞は“了2〈行為〉”と共起し難いと指摘する研究が多い¹³。(35)という焦点検証の結果が示すように、(34)の焦点は副詞“经常”(しばしば)という「静相」義の言語形式にしか当てられない。(12b) - (14b)の分析と同じく、「述語優先」原則が作用することから、(34)は「発生」義と「変化」義のいずれを表すのかが特定できない。そのため、(34)は、(34)以外の意味情報が付与されなければ、容認度が低い文と判断されやすい。

3.2. 変化を指示する発話場面におけるS「瞬間述語+“了2〈行為〉”」

S「瞬間述語+“了2〈行為〉”」はどのような構文的特徴を持つのか、もしくは、どのような文成分を持つのかということにかかわらず、変化を指示する発話場面が付与されるとしたら、優先的に「変化」義を表す。本節では、変化を指示する発話場面を次の(37)、(39)、(41)、(43)、(45)、(47)、(49)、(50)、(57)、(58)、(59)が示すように設定した上で、S「瞬間述語+“了2〈行為〉”」の「変化」義を考察する。

(36) 我学会两个游戏了。(= (15b))

(私はゲームのルールを二つ覚えた。/私が覚えたゲームのルールは二つになった。)

(37) 〈発話場面〉

¹³ 譚春健 (2004)、黎莉・胡弢 (2004)、黄瓚辉・石定栩 (2013)、陆方喆 (2014)、黄瓚辉 (2016)、夏炎青 (2017)などを参照のこと。

我这个月之内要完成一个任务，就是要学会朋友指定的三个很难的游戏。今天，朋友问：“听说，一周前你学会了一个游戏，现在呢？”我回答：“到现在为止，我学会两个游戏了。”朋友再确认：“真的吗？你学会两个游戏了？”我回答：“真的，两个了。”

(私は今月中に次の任務を完成しなければならない。それは、友達に指定された三つの難しいゲームのルールを覚えることだ。今日、友達は、「一週間前、指定したゲームのルールを一つ覚えたそうだけど、今はどう？」と聞いた。私は、「今は、私が覚えたゲームのルールは二つになった。」と答えた。友達は「本当？ゲームのルールを二つ覚えたの？」と確認して、私は「そうよ、二つになったよ。」と返事した。)

(38) 他当大夫十几年了。(= (16b))

(あの方は医者に十数年勤めている。/あの方は医者に勤めて十数年になる。)

(39) 〈発話場面〉

我对朋友说：“很多年前，我去找他看病，那时候他才当上大夫两年。现在，他还在做大夫吗？”朋友说：“还在做大夫。”我又问：“那他当大夫当了多少年啊？”朋友说：“他当大夫十几年了。”我惊讶地确认：“他当大夫十几年了？”朋友说：“是啊，十几年了。”

(私は、「何年前かもう覚えていないが、その時に私は病気にかかってあの方にみていただいた。その時、あの方は医者になってたしか2年だった。今はまだ医者に勤めているの？」と友達に聞いた。友達は「まだ勤めているよ。」と答えた。私は「じゃ、今まで何年勤めているかな？」と聞いて、友達は「あの方は医者に十数年勤めているよ。」と返事した。私はびっくりして、「あの方は医者に十数年勤めているのか？」と確認して、友達は「そうよ、十数年になるよ。」と答えた。)

(36)、(38) はそれぞれ 3.1.2 節の (15b)、(16b) である。3.1.2 節の焦点検証から分かるように、(36)、(38) の焦点は瞬間述語にも、瞬間述語以外の文成分にも当てられることができる。(36)、(38) は、もし瞬間述語に当てられるならば、「発生」義のメカニズムに適合して「発生」義を表すが、瞬間述語以外の文成分に当てられるならば、「変化」義のメカニズムに適合して「変化」義を表す。ただし、(36) が「“一个” (一つ) → “两个” (二つ)」という変化を指示する発話場面 (37) に用いられ、(38) が「“两年” (2年) → “十几年” (十数年)」という変化を指示する発話場面 (39) に用いられるとしたら、(36)、(38) の“了2 (行為)”はそれぞれ「“一个” (一つ) → “两个” (二つ)」、「“两年” (2年) → “十几年” (十数年)」という数量的な「変化」義を明らかに表す。

(40) ?他唱歌唱得真好听了。(= (12b))

(?彼はうまく歌った。/?彼はうまく歌えるようになってきている。)

(41) 〈発話場面〉

我对朋友说：“我听过小李的歌，唱得很难听。”朋友说：“他以前是不行，但现在不同了！”于是朋友让我听了小李最近的歌声录音。我听了之后连忙说道：“哎呀，果然真的不同了！他唱歌唱得真好听了。”朋友再次向我确认：“真的？你刚才说，他唱歌唱得真好听了？我原本以为你会说不好听呢。”我再次肯定地说：“真的，真好听了。”

(私は友達に、「李さんの歌を聞いたことがある。下手だった。」と文句を言った。友達は、「昔は確かに下手だったけど、今は違うよ。」と言い返して、また、李さんの最近の歌の録音を私に聞かせた。聞くと、私は驚いて、「あら、確かに。彼はうまく歌えるようになってきている。」と言った。友達は「本当？彼はうまく歌えるようになってきているのか？相変わらず下手だと言われると思ったのに。」と確認して、私は肯定的な態度で「本当だよ。うまくなってきているよ。」と答えた。)

(42) ?他随随便便地回答我了。(= (13b))

(?彼に勝手に答えられた。!?彼に勝手に答えられるようになった。)

(43) 〈発話場面〉

我对闺蜜说：“我觉得最近我男朋友对我的态度变了。”闺蜜问：“怎么了？”我说：“你看，以前，无论我问他什么问题，他都会很认真地回答我。但最近，我问他问题时，他随随便便地回答我了，不像以前那么认真了。”闺蜜很震惊地向我确认：“不会吧！他随随便便地回答你了？”我肯定地说：“真的，随随便便地了。”

(私は親友に、「最近、何だか彼氏の態度がおかしくなってきた。」と訴えた。親友は「どうしたの?」と聞いた。私は、「ほら、この前は、彼に何の質問を聞いても、すべてにまじめに答えてもらえていたけれど、最近は、聞いたら、彼に勝手に答えられるようになった。この前のようなまじめな態度がもう見られなくなった。」と返事した。親友は驚いて、「うそ!彼に勝手に答えられるようになったのか?」と確認して、私は明確的な態度で「そうよ、勝手になったよ。」と答えた。)

(44) ?弟弟昨天一边看电视，一边做作业了。(= (14b))

(?弟は昨日テレビを見ながら、宿題をしていた。!?弟は昨日からテレビを見ながら、宿題をするようになった。)

(45) 〈発話場面〉

我和朋友聊天时，说到自己弟弟最近的一些行为发生了一些变化。我说：“最近，我弟弟变了。以前，弟弟看电视的话就只看电视，做作业的话就只做作业。但是，弟弟昨天一边看电视，一边做作业了。”

(私は、最近弟の習慣が変わったということについて友達にしゃべって、次のことを

言った。「最近、何だか弟は変わった。昔、弟はテレビを見るならテレビを見るだけで、宿題をするなら宿題をするだけだった。しかし、弟は昨日からテレビを見ながら、宿題をするようになった。」)

(46) ?大崔经常来了。(= (34))

(?崔さんがしばしば来た。!?崔さんがしばしば来るようになった。)

(47) 〈発話場面〉

李先生住到我房子里以后，大崔就经常来了。(BCC)

(李さんが私のうちに宿泊して以来、崔さんがしばしば来るようになった。)

(40)、(42)、(44)、(46) はそれぞれ 3.1.2 節の (12b)、(13b)、(14b)、(34) である。「メタ発話場面」の場合、(40)、(42)、(44)、(46) においては、瞬間述語と「静相」義の専有の言語形式の間に生じる「焦点争奪」現象がそれぞれの例文の容認度を低めるということ を 3.1.2 節で論じた。ところが、上記の発話場面 (41)、(43)、(45)、(47) を設定すると、(40)、(42)、(44)、(46) は容認度が高くなる。なぜならば、聞き手は、「“(得) 很难听” (下手) →“(得) 真好听” (うまく)」という補語的な変化を指示する発話場面 (41) から発話者の「了 2 (行為)」を用いる意図、つまり、「変化」義を表す意図が特定でき、「“很认真” (まじめに) →“随随便便” (勝手に)」という様態的連用修飾語の変化を指示する発話場面 (43) から発話者の「変化」義を表す意図が特定でき、「“只 (做作业/看电视)” ((宿題をする/テレビを見る) だけ) →“一边 (看电视/做作业)” (宿題をし) ながら (テレビを見る)」という副詞的連用修飾語の変化を指示する発話場面 (45) から発話者の「変化」義を表す意図が特定でき、「以后” (以来/から) という時間的な変化を指示する発話場面 (47) から発話者の「変化」義を表す意図が特定できるからである。

(48) 那天晚上下雨了。(= (8))

(その夜に雨が降った。)

(49) 〈発話場面〉

A 和 B 住的地区有这样一个现象：每周三早上必定下雨，而且都是周三的早上下雨，周三其他时间段从来不下雨。这种现象持续了很多年。突然，上周三的下雨时间出现了异常：早上没下雨，反而变成了晚上下雨。由于 B 还不知道这个事，于是 A 对 B 说：“上周三出现怪事了！那天虽然下雨了，但不是早上下雨，你知道是什么时候吗？”B 问：“不是早上还能是什么时候？”A 说：“那天晚上下雨了！晚上了！”

(A さんと B さんが住んでいる地域にはおもしろい自然現象がある。毎週の水曜日の朝は雨が必ず降り、水曜日の朝以外の時間帯には必ず降らないのである。ところが、

先週の水曜日の朝は雨が降らず、夜に降るという珍しいことがあった。Bさんがその珍しいことをまだ知らないので、AさんはBさんに教えている。Aさんは、「先週の水曜日は変なことがあったんだよ!その日は雨が降ったけど、降った時間が朝じゃなかったんだよ。」と言った。Bさんは、「朝じゃなかったの?いつのことだったの?」と聞いた。Aさんは、「その夜に雨が降ったよ。夜になったよ。」)

(50) 〈発話場面〉

A和B住的地区有这样一个现象：该地区几乎从来不下雨，但是会经常下沙。不料，上周三的深夜下雨了，而不是下沙。由于B还不知道这个事，于是A对B说：“上周三出现怪事了!那天晚上从天空飘下来的不是沙，你知道是什么吗?”B问：“不下沙那还能下什么?”A说：“雨了!那天晚上下雨了!”

(AさんとBさんが住んでいる地域にはおもしろい自然現象がある。雨はめったに降らないが、砂はよく降るのである。ところが、先週の水曜日の深夜は砂の代わりに雨が降ったのである。Bさんがその珍しいことをまだ知らないので、AさんはBさんに教えている。Aさんは、「先週の水曜日の夜は変なことがあったんだよ!その夜は降ったのが砂じゃなかったんだよ。」と言った。Bさんは、「砂じゃなかったら、何だったの?」と聞いた。Aさんは、「雨になったよ。その夜は雨が降ったよ。」)

(48)は3.1.2節の(8)である。3.1.2節から分かるように、「メタ発話場面」の場合、(48)は「発生」義のメカニズムに適合して「発生」義を表す。ところが、発話場面(49)と(50)を設定すると、(48)は「発生」義ではなく、「変化」義を明らかに表す。なぜならば、「“早上”(朝)→“晚上”(夜)」という時間的連用修飾語の変化を指示する発話場面(49)から、また、「“沙”(砂)→“雨”(雨)」という目的語の変化を指示する発話場面(50)から、聞き手は発話者の“了2(行為)”を用いる意図、つまり、「変化」義を表す意図が特定できるからである。

次の(51) - (53)で、S“了2(行為)”の焦点が「瞬間」義の言語形式に当てられても「発生」義を表さないという例外のように見えることを考察していく。

(51) 吃饭了。

(ご飯を食べた。)

(52) 打起来了。

(殴り出した。)

(53) 打死人了。

(この人を殴り殺してしまった。)

まず、次の焦点検証が示すように、「メタ発話場面」において、(51) - (53) の焦点は“吃”（食べる）、“打起来”（殴り出す）、“打死”（殴り殺してしまう）などの述語に当てられる。

(54) 〈(51) の焦点検証〉

A: 吃饭了?

B: 吃了。/?饭了。

(A: ご飯を食べたのか?)

(B: 食べた。/?ご飯になった。)

(55) 〈(52) の焦点検証〉

A: 打起来了?

B: 打起来了。

(A: 殴り出したのか?)

(B: 殴り出した。)

(56) 〈(53) の焦点検証〉

A: 打死人了?

B: 打死了。/?人了。

(A: この人を殴り殺してしまったのか?)

(B: 殴り殺してしまった。/?この人になった。)

また、“吃”（食べる）、“打起来”（殴り出す）、“打死”（殴り殺してしまう）などの述語はいずれも「瞬間」義の言語形式であるため、「瞬間」義を表すことができる。このように、「メタ発話場面」において、(51) - (53) は「焦点=『瞬間』義を表す述語」という「発生」義の形成メカニズムに適合して「発生」義を表す。ところが、(51) - (53) は次の発話場面 (57) - (59) に用いられると、それぞれの焦点が同じく“吃”（食べる）、“打起来”（殴り出す）、“打死”（殴り殺してしまう）などの「瞬間」義の言語形式に当てられても、「発生した」、「起こった」、「あった」などの「発生」義を表さない。これは本論文で主張する“了2〈行為〉”の意味の形成メカニズムに反しているように見える。

(57) 〈発話場面〉

亲属：“来，吃饭了!”

病人：“好，吃饭了。吃了。”¹⁴（肖治野・沈家焯 2009：522）

（家族：ね、ご飯を食べるぞ。）

¹⁴ 発話場面 (57) の対話内容は、肖治野・沈家焯 (2009：522) の原文“亲属说：‘来，吃饭了!’病人最后说：‘好，吃饭了。’”を書き換えたものである。

(病人：はいよ、ご飯を食べる。食べるから。)

(58) 〈発話場面〉

磊春紧紧攥住他（经理）的手：“不许动我的秤！”经理圆睁双眼，竭力挣扎。磊春咬紧牙，不让他有脱手的机会。“要打起来了！打起来了！快去叫经理女人来。”顾客中不知谁喊了一声。（BCC）

（磊春さんはあの人（社長）の手を必死に掴んで、「私の秤に触るな！」と怒った。社長は眉をつり上げて、磊春さんから逃れようとあがいている。にもかかわらず、磊春さんは手放そうともしない。一人のお客さんが、「まもなく殴る！殴るよ！はやく社長の妻を呼びに行ってくれ。」と叫んだ。）

(59) 〈発話場面〉

（近接未来に起きることを予想される事態を発話者が発話する）打死人了！打死！别打了！¹⁵（劉 2006：106）

（近接未来に起きることを予想される事態を発話者が発話する）この人を殴り殺してしまうぞ！殴り殺してしまうぞ！もうやめろ！

実は、発話場面 (57) - (59) の文脈が作用することから、(51) - (53) の瞬間述語“吃”（食べる）、“打起来”（殴り出す）、“打死”（殴り殺す）は、「瞬間」義を表す言語形式であると認知されず、表 4 で述べた「静相」義の非専有の言語形式としての「①『瞬間』義の言語形式」、つまり、「静相」義を表す言語形式であると認知される¹⁶。具体的には、“吃”（食べる）、“打起来”（殴り出す）、“打死”（殴り殺す）はそれぞれ“吃”（食べる）の態勢、“打起来”（殴り出す）の態勢、“打死”（殴り殺す）の態勢などの態勢的な「静相」義を表す。このように、発話場面 (57) - (59) に用いられる (51) - (53) は「焦点=『静相』義を表す文成分」という「変化」義の形成メカニズムに適合するということが分かる。したがって、「発生した」、「起こった」、「あった」などの「発生」義を表さない。発話場面 (57) - (59) に用いられる (51) - (53) が表す「変化」義はそれぞれ「“吃”（食べる）の態勢に入っていない状態（例えば、遊んでいる状態）→“吃”（食べる）の態勢に入っている状態」、「“打起来”（殴り出す）の態勢に入っていない状態（例えば、和気あいあいである状態）→“打起来”（殴り出す）の態勢に入っている状態」、「“打死”（殴り殺してしまう）の態勢に入っていない状態（例えば、殴り合っている最中）→“打死”（殴り殺してしまう）の態勢に入っている状態」という態勢的な「変化」を指す。

¹⁵ 発話場面 (59) の内容は、劉 (2006：106) の原文“（近接未来に起きることを予想される事態を発話者が発話する）打死人了！别打了！”を書き換えたものである。

¹⁶ 第 1 節で指摘したように、どの語でも「静相」義を持つからである。

4. S「過程述語+“了2〈行為〉”」の「変化」義

3.1.1 節の(2) - (4)は、事象が生じる前の状態、つまり、「無」の状態を際立たせず、事象が生じた結果、つまり、「有」の結果だけを際立たせる。しかし、次の(60)、(61)は事象が生じる前の状態も際立たせる。

(60) 小李在厨房包着饺子了¹⁷。(杉村 2009 : 4)

(李さんはもう(別のことをやっているのではなくて)台所で餃子を包んでいるよ。)

(61) 太鲁阁我去过了。(劉 2006 : 135)

((今なら)太魯閣に行ったことがあるんだ。)

(60)、(61)の述語はそれぞれ“包着”(包んでいる)、“去过”(行ったことがある)である。仮に、“包着”(包んでいる)、“去过”(行ったことがある)という事象が生じた結果、つまり、「有」の結果だけを際立たせようとしたら、“了2〈行為〉”を伴わない次の(62)、(63)を用いればよい。

(62) 小李在厨房包着饺子。

(李さんはもう台所で餃子を包んでいる。)

(63) 太鲁阁我去过。

(太魯閣に行ったことがある。)

(62)、(63)と比較すると分かるように、(60)、(61)は、“包着”(包んでいる)、“去过”(行ったことがある)が生じる前に何らかの古い状態が存在していたことも含意する。この特徴は本論文で規定する「変化」義の特徴に合う¹⁸。それでは、(60)、(61)の“了2〈行為〉”は「変化」義の形成メカニズムに適合するのであろうか。次の二点に分けて確認しよう。第一に、次の焦点検証の結果が示すように、(60)、(61)の焦点は述語“包着”(包んでいる)、“去过”(行ったことがある)に当てられる。

(64) 〈(60)の焦点検証〉

¹⁷ (60)は、杉村(2009:4)の原文“小李在厨房包饺子了。”を書き換えたものである。

¹⁸ 第2節で指摘したように、「変化」義とは、古い状態の存在を含意する概念として、客観的時間にしたがって何らかの古い状態から何らかの新しい状態に変わったということを表すからである。

A: 小李在厨房包着饺子了?

B: 是的, 包着了。/?是的, 小李了。/?是的, 饺子了。/?是的, 在厨房了。

(A: 李さんはもう台所で餃子を包んでいるの?)

(B: はい, 包んでいる。/?はい, 李さんになった。/?はい, 餃子になった。/?はい, 台所になった。)

(65) 〈(61)の焦点検証〉

A: 太鲁阁你去过了?

B: 去过了。/?太鲁阁了。/?我了。

(A: 太魯閣に行ったことがあるの?)

(B: 行ったことがある。/?太魯閣になった。/?私になった。)

第二に、(60)、(61)の述語“包着”（包んでいる）、“去过”（行ったことがある）は、表2の「①『裸形動詞+線的動相標識』構造の複合動詞』」であり、即ち、「過程」義の言語形式である。このように、(60)、(61)は「焦点=『過程』義を表す文成分」という「変化」義の形成メカニズムに適合するのである。

杉村（2009）と木村（2013）は、(60)は(60)以外の意味情報が追加されなければ、不自然であると指摘している。杉村（2009：4）は(60)が容認度が高くなるための発話場面を次の(66)のように設定している。

(66) 〈発話場面〉

A: 小李在哪儿?他还在看电视吗?

B: 小李在厨房包着饺子了, 你赶紧去帮他吧¹⁹。(杉村 2009：4)

(A: 李さんはどこだ?まだテレビを見ているの?)

(B: 李さんはもう台所で餃子を包んでいるよ。はやく手伝いに行ってね。)

発話場面(66)に用いられる(60)は容認度が高い理由について、杉村（2009）は発話意図推定という語用論的な側面から説明している。実は、本論文で主張する「変化」義という意味的な側面から説明しても可能である。もともと(60)は「変化」義の形成メカニズムに適合するので、変化を指示する発話場面で用いられやすいはずである。上記の発話場面(66)には「“在看”（見ている）の過程→“包着”（包んでいる）の過程」という明示的な変化内容が含まれているため、(60)は用いられやすい。

また、次の発話場面(67)には「“听过”（聞いたことがある）という状態→“去过”（行

¹⁹ 発話場面(66)のB文は、杉村（2009：4）の原文は“小李在厨房包饺子了, 你赶紧去帮他吧。”を書き換えたものである。

ったことがある) という状態」という明示的な変化内容が含まれているため、(61) は発話場面 (67) に用いられやすい。

(67) 〈発話場面〉

A: 那个时候, 太鲁阁我只是听过。

B: 那后来呢?

A: 后来呀, 太鲁阁我去过了。

(A: その時、太魯閣を聞いたことがあっただけだ。)

(B: その後は?)

(A: その後は、太魯閣に行ったことがあるんだよ。)

ところで、S「過程述語+“了2〈行為〉”」構文は、瞬間述語、即ち、「瞬間」義の言語形式がないため、S「過程述語+“了2〈行為〉”」構文の焦点は主語、過程述語、目的語、連体修飾語、連用修飾語、補語のどの文成分に当てられても、決して「瞬間」義の言語形式に当てられない。したがって、S「過程述語+“了2〈行為〉”」構文が「焦点=『瞬間』義を表す述語」という「発生」義のメカニズムに適合することは不可能であり、「変化」義を表すよりほかない。ただし、具体的にどのような「変化」義を表すのかについては、「述語優先」原則や発話場面が指示する変化内容などを踏まえて判断しなければならない。

5. S「静相述語+“了2〈行為〉”」の「変化」義

次の(68) - (71) を例に、S「静相述語+“了2〈行為〉”」構文の「変化」義を説明しよう。a例とb例を比較して分かるように、a例は、何らかの安定している状態を表し、状態の変化などの意味を表さない一方、b例は、過去に存在していた何らかの状態から現在の命題に見られる状態に変化したという意味を表す。

(68) a. 他大学校长。

(あの方は大学の学長だ。)

b. 他大学校长了。(闫亚平 2016 : 58)

(あの方は大学の学長になった。)

(69) a. 他是科长。

(あの方は課長だ。)

b. 他是科长了。

(あの方は課長になった。)

(70) a. 我怕你爸爸。

(私はあなたのお父さんが恐ろしい。)

b. 我怕你爸爸了。

(私はあなたのお父さんを恐れるようになった。)

(71) a. 女儿会游泳。

(娘は泳ぐことができる。)

b. 女儿会游泳了。(BCC)

(娘は泳ぐことができるようになった。)

では、(68b) - (71b) の“了 2 (行為)”は「変化」義の形成メカニズムに適合するのであろうか。次の二点に分けて確認しよう。第一に、(68b) - (71b) はいずれも黄瓚輝 (2016 : 42-58) が述べている「簡単形式」であるため、「述語優先」原則が作用することから、それらの焦点は述語に当てられるはずである。第二に、(68b) - (71b) の述語はいずれも表 4 で述べた「静相」義の専有の言語形式であることが分かる。例えば、(68b) の述語“大学校长” (大学の学長) は「④動詞以外の品詞」である。(69b) の述語“是” (である) は「①点的動相標識とも線的動相標識とも共起することができない裸形動詞」である。(70b) の“怕” (恐ろしい恐れる) は「②程度副詞で修飾されることができない裸形動詞」である。(71b) の“会游”は「③『助動詞 (+本動詞)』構造」である。このように、(68b) - (71b) は「焦点=『静相』義を表す文成分」という「変化」義のメカニズムに適合するということが分かる。そのため、(68b) - (71b) は「変化」義を表す。

ところで、S「静相述語+“了 2 (行為)”」構文は、瞬間述語、即ち、「瞬間」義の言語形式がないため、S「静相述語+“了 2 (行為)”」構文の焦点は主語、静相述語、目的語、連体修飾語、連用修飾語、補語のどの文成分に当てられても、決して「瞬間」義の言語形式に当てられない。したがって、S「静相述語+“了 2 (行為)”」構文が「焦点=『瞬間』義を表す述語」という「発生」義のメカニズムに適合することは不可能であり、「変化」義を表すよりほかない。ただし、具体的にどのような「変化」義を表すのかについては、「述語優先」原則、発話場面が指示する変化内容、鄧 (2018) が提示している S「静相述語+“了 2 (行為)”」の否定命題の観点²⁰などを踏まえて総合的に判断しなければならない。

6. 終わりに

以上、S「瞬間述語+“了 2 (行為)”」、S「過程述語+“了 2 (行為)”」、S「静相述語+“了 2 (行為)”」という三つの構文に基づいて、“了 2 (行為)”の意味の形成メカニズムを検

²⁰ 鄧 (2018) で論じたように、S「静相述語+“了 2<行為>”」は、S「静相述語+“了 2<行為>”」以上の情報が付与されない発話場面において、“不”+静相述語という否定命題が指示する意味から「静相述語」が指示する意味に変わったという「変化」を表す。

証した。検証の結果、「瞬間」義、「過程」義、「静相」義、「意味的焦点」という四つの要素の相互作用が“了 2〈行為〉”の意味の形成メカニズムに大きく関係していることが明らかになった。

参考文献

- 陈荣杰 (2005) 〈副词“就”和“才”之比较〉《和田师范专科学校学报》3, pp.136-138.
- 陈小红 (2007) 〈“了 1”、“了 2”语法意义辨疑〉《语言教学与研究》5, pp.54-60.
- Deng, Yuyang (2019) Re-exploring the Sentence-final Particle “LE” in the Propositional Domain, Epistemic Domain and Dialogic Domain. *Journal of Literature and Art Studies* 1. pp.63-68.
- 邓宇阳 (2019) 〈重新探讨行域层面的句末助词“了”的语义及其生成机制〉『言語研究』4, pp.42-54.
- 顾阳 (2007) 〈时态、时制理论与汉语时间参照〉《语言科学》4, pp.22-38.
- 胡建刚 (2007) 〈副词“刚”的语义参数模式和语义发展脉络〉《语言教学与研究》5, pp.68-75.
- 黄瓚辉・石定栩 (2013) 〈量化事件的“每”结构〉《世界汉语教学》3, pp.305-318.
- 黄瓚辉 (2016) 〈“了 2”对事件的存在量化及标记事件焦点的功能〉《世界汉语教学》1, pp.42-58.
- 金立鑫 (2009) 〈解决汉语补语问题的一个可行性方案〉《中国语文》5, pp.387-398.
- 金立鑫・于秀金 (2013) 〈“就/才”句法结构与“了”的兼容性问题〉《汉语学习》3, pp.3-14.
- 金立鑫・杜家俊 (2014) 〈“就”与“才”主观量对比研究〉《语言科学》2, pp.140-153.
- 木村英樹 (2013) 『中国語文法の意味とかたち—「虚」の意味の形態化と構造化に関する研究—』白帝社.
- 黎莉・胡弢 (2004) 〈试析“V+了 1+NP”和“V+了 1+NP+了 2”的时间性特征〉《江西教育学院学报》6, pp.126-128.
- 劉綺紋 (2006) 『中国語のアスペクトとモダリティ』大阪大学出版会.
- 刘月华・潘文娉・故鞞 (2016) 《实用现代汉语语法》商务印书馆.
- 陆方喆 (2014) 〈基于语料库的助词“了”研究〉《宁波大学学报》4, pp.43-47.
- 吕叔湘 (2016) 《现代汉语八百词》商务印书馆.
- 祁峰 (2012) 《现代汉语焦点研究》上海复旦大学博士論文.
- 沈家煊 (2003) 〈复句三域“行、知、言”〉《中国语文》3, pp.195-204.
- 石定栩・胡建华 (2006) 〈“了 2”的句法语义地位〉, 中国语文杂志社(編)《语法研究和探索》13, pp.94-112, 商务印书馆.
- 杉村博文 (2009) 〈事件脚本和“了 2”的用法表述〉《对外汉语研究》1, pp.1-12.
- 孙英杰 (2006) 《现代汉语体系统研究》北京言語大学博士論文.
- Sweetser, Eve (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantics Structure*. Cambridge University Press.

- 譚春健 (2004) 〈句尾“了”構成的句式、語義及語用功能〉《漢語學習》2, pp.26-31.
- 鄧宇陽 (2018) 「否定命題“不 V”の視点からみる文末の“了”の使用条件」『言語研究』3, pp.58-66.
- 鄧宇陽 (2019) 「“了 2”の意味の種類と意味間の関係」, 『現代社会文化研究』69, pp.117-133.
- 王维贤 (1997) 《现代汉语语法理论研究》语文出版社.
- 王珊珊 (2014) 〈陈述句末“了”能否省略情形考察〉《教育教学论坛》31, pp.138-139.
- 王冬梅・姜炫先 (2015) 〈从肯定和叙述的角度看副词“就、才”和句末“了、的”的共现〉《语言教学与研究》6, pp.45-52.
- 夏炎青 (2017) 《现代汉语句末助词“了”的句法语义属性及其对语序的影响》上海外国语大学博士学位論文.
- 肖治野・沈家煊 (2009) 〈“了 2”的行、知、言三域〉《中国语文》6, pp.518-527.
- 徐烈炯 (2017) 〈焦点的不同概念及其在汉语中的表现形式〉《现代中国语研究》2, pp.172-190.
- 闫亚平 (2016) 〈构式视角下看“X+N/NP+了”中“N/NP”述谓义的获得〉《西南科技大学学报》3, pp.57-62.
- 杨凯荣 (2013) 〈从表达功能看“了”的隐现动因〉《汉语学习》5, pp.31-43.
- 岳中奇 (2000) 〈“才”、“就”句中“了”的对立分布与体意义的表述〉《语文研究》3, pp.19-27.
- 邹海清 (2014) 〈句尾“了”的语法意义〉《乐山师范学院学报》11, pp.34-45.
- 朱德熙 (2016) 《语法讲义》商务印书馆。